

## 未来眼やまがた 第17回

# 地域の文化を反映する“森林”

日本は国土の67%、山形県は県土の72%を森林が占めている。しかし、森林を取り巻く環境はこれまで厳しい状況が続いてきた。木材価格の長期低迷から林業経営の不振、林業経営者の高齢化、それによって間伐や管理の放棄林が増えている。一方、環境への関心が高まるなか、森林の二酸化炭素の吸収源としての役割、治山・治水などの多面的な役割が注目されている。

私たちはこれから、森林とどのように付き合っていけばよいのだろうか。森林学研究の第一人者である、山形大学名誉教授の北村昌美氏に聞いた。

### ■ 荒廃が進む森林の現状

**町田** 最近ようやく、森林や山の大切さが理解されつつあります。先生は森林の問題をどのようにご覧になっていますか。

**北村** このところ「森林の時代」と言わ

れるようになって、森林の大切さの話をしていても反対する人はおそらく皆無でしょう。

山形県でも平成19年から「やまがた緑環境税」が導入されました。しかし、森林がどのような役割を担っているのか、例えば森林が水を供給し、土砂を防ぐなどの公益的な機能を担うことや林業の危機的状況などについて、市民の理解はまだ広がっていないような気がします。

**町田** 農業については「6次産業化」など、少しずつ光が当たりはじめてきましたが、林業は未だ遅れている感じがします。これからは、地球環境や木材資源など国をあげて森林の問題に取り組んで行かなくてはなりません。そうでなければ森林が荒れるだけでなく、住民の生活も荒廃が進むのではないのでしょうか。

**北村** その通りです。これからは、社会全体の問題として森林をとらえていく必要があります、森林にとって今こそ変革の時にあると思います。

日本ではこれまで、確固たる理念がなく、ただ森林を保有してきました。「森林は放っておいても大丈夫」、「森は自然に大きくなる」とされてきたところがあり、森林を深く極めようとしてきませんでした。しかし、ようやくそのことが変わりつつあり、この時期に「これからの森林をどうするか」という議論が広がってくればと期待しています。

### ■ 森林再生のチャンスが到来した

**町田** 山形県に住むようになってからこの15年間に、仕事柄何度も庄内と内陸を行き来しています。月山を移動する間に映る自然の四季の移ろいは私にとって、楽しみ、癒しの時になっています。

月山の美しさを構成しているのがブナ林です。特に新緑の時期のブナには感動します。もちろん紅葉の時期も美しいのですが、新緑のブナの色彩は何とも言えない美しさです。

**北村** 山形のブナは偉大で貴重な存在です。ブナは全国に分布していますが、鶴岡市のように人口が密集する地域に生育しているのは日本では珍しいことです。

しかし、日本でブナがよく知られるようになってきたのはごく最近のことで、むしろブナは高価格の針葉



●町田 睿（まちだ・さとる）

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、株式会社富士銀行入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、1994年株式会社荘内銀行取締役副頭取、1995年取締役頭取に就任、2008年より取締役会議長。

樹からみればむしろ邪魔者とされたこともありました。

このところ、白神山地が世界遺産に指定されるなど、ようやくブナが注目されるようになってきましたが、大切なことは、人々の心の中にどれだけブナが染みこんでいるか、どれだけ森林に関心を向けるか、また森林と関わり合うかということだと思えます。

**町田** 環境問題だけでなく、日本の文化レベルが上がったことによって、次第に森林への関心も高まっています。人々の関心は物質的な豊かさから文化的な価値に変わっています。

**北村** 今は「変化の時代」といわれます。視点を変えることによって、今まで考えられなかったような「変化」が起こる時代になってきました。

映画「おくりびと」が米アカデミー賞を受賞したことで、庄内が世界から注目を集めるようになったように、これまで皆が気付かなかったところに光が当たり始めているのです。

## ■ 経済だけでは測れない森林の価値

**町田** 先生が提唱されておられる「森林文化」や「森林の記憶」という考え方に、大変感銘を受けました。

**北村** 森林と文化は、一見何の関係もないように思えますが、私はこれまで50年間という長い間森林の研究を続けるなかで、森林を「もの」としてだけみるのではなく、「文化」として捉えなくてはならないと、気付いたのです。つまり文化、暮らし、宗教などの分野に広げなくては見えてこないことに気付きました。表だけから見るのではなく、視点を変えて幕の後ろ側に回ってみると、今まで見えなかったいろんなものが見えてくるようになるのです。

しかし、森林というと、多くの人は「もの」とイメージするようです。つまり、何か箱物をつくるようなイメージで「それで何ができるのですか」、「どれくらいもうかるのですか」、「そのためにどうしたらいいのですか」という話題になるのですが、森林で大事なことは、「もの」ではなく「心」であることに着目してもらいたいのです。

例えば「森林でどれだけもうかるか」と、森林をお金だけの対象としてみれば、もうかる対象ではありません。これまで森林は「もうからないもの」とされ、ずっと森林の価値を回復できずにきました。

経済的な視点だけで森林価値を考えるのではなく、「森林はただ存在するだけで素晴らしい」ということを皆さんに理解してもらわないと、まだ真の理解ではないと思っています。

**町田** 森林の問題だけでなく、一般的に「いくらもうかるか」ということだけを求めた結果、サブプライム



●北村 昌美 (きたむら・まさみ)

1926年兵庫県生まれ。京都大学農学部卒業。山形大学農学部教授、同学部長、ドイツ・フライブルグ大学客員教授、中央森林審議会会長を歴任。農学博士。山形大学名誉教授。鶴岡市名誉市民。専攻は森林経理学・比較森林文化論。河北文化賞、日本林学会賞、日本林学功績賞、日本雪氷学会功績賞を受賞。瑞宝中綬章授章。

問題など世界的な金融危機を引き起こしてしまったのだと思います。行き過ぎた市場原理万能主義が世界を混乱させてしまった訳です。

**北村** 私も同感です。現代は科学が優位にあり、文化が欠けています。経済優先だけが突出し、全てのことを経済の視点でみるようになってしまったため、例えば「森林を増やそう」と訴えても、残念ながら「それでどれだけもうかるのか」などの評価にとどまってしまう。

ところが問題の本質はそこではないということに、気がつかなくてははいけません。経済的な視点で森林をとらえたら、森林が衰退してしまうのは当たり前です。そうではなく、人がどのような意識で森林と関わっていくか、つまり哲学的な視点が先になければ、森林の存続はないのです。

## ■ 森林から地域の文化や暮らしが見える

**町田** 私は2つの理由から、森林の復権が可能な時代に突入しているのではないかと考えています。

1つには、無限だと思っていた地球が実は限られた資源しかもたない小さな球体で、近い将来人間だけでなくすべての生物も存在するのが難しくなると、多くの人が危機意識を持ち始めたことです。19世紀は石炭、20世紀は石油の時代と言われますが、21世紀は太陽の時代という認識が広がると、おのずと森林の役割への注目が広がってくると思います。

2つめの理由は、地方の復権です。明治維新以降、欧米に追いつくことを目指して、中央集権で国づくりを進めてきましたが、その結果、山形県の森も秋田県

の森もまったく区別出来なくなりました。

本来、森林はそれぞれの地方に蓄積された文化を映し出す鏡とも言われています。先生の著書にもあるように、ドイツの森やフランスの森は国境や文化が違えば、違う森林が広がっています。

**北村** 森林を見ればその地域の文化や歴史や暮らしなどが見えてくるのです。つまり森林にその地域や風土が凝縮されており、その土地の文化や文明が森林に反映するのです。

**町田** 日本の森林もそれぞれの地方に蓄積された文化が反映されており、そのために、それぞれの自然環境や歴史・文化を大事にしようという流れが少しずつ地域にも現れてきているような気がします。

**北村** 大学でも地域に対する貢献を強く意識するようになってきました。ただ「地域にある大学」だけでなく「地域のための大学」という動きが広がっています。

**町田** 山形大学農学部では赤カブやだだちゃ豆など、これまであまり着目されなかった在来作物の研究に、取り組んでおられますね。

**北村** 在来作物は、食料としての価値だけでなく、その地域の歴史や文化、栽培方法や利用方法など、その地域で生きていくのに役立つ知的財産を未来に伝える媒体です。そのことを最初に指摘したのは元山形大学農学部の青葉先生です。山形には西日本に比べて、在来作物が多く残っており、そこから見えてくる様々な文化的価値が見直されています。

**町田** 「地産地消」、「グリーンツーリズム」などに見られるように、それぞれの地域の持つ独特の文化、歴史、資源がずいぶん見直されてきています。

秋田県田沢湖の麓で地域づくりに取り組む「わらび座」という芸術村があります。首都圏の芸術家を巻き込みながら優れた芸術作品を提供するだけでなく、訪れた人に宿泊、料理、地元的生活基盤を用意し、芸術を楽しんでもらう活動です。このように地方の文化の特徴を尊重し合う取り組みが増えてくると、地方に様々な変化があらわれてくるようになるでしょう。

**北村** 人間が理屈でものごとを進め、その因果関係や対策を明らかにするという科学の方法だけでは、必ず限界がきます。わらび座の取り組みは、理屈をこねて出来あがったものではなく、彼らの持っているエネルギーが爆発し、その実績が積み重なってきたところが素晴らしいと思います。

わらび座のように、これまでの学問体系とは違う道を歩み始めている活動が増えており、常識的な学問体型では追いつかなくなっています。これまで想像できなかった発想から新しい動きが生まれています。その点から、森林に関しても、これまでの見方を変える絶



ブナの原生林や多数の高山植物が自生する朝日連峰

好の時期だろうと思います。

## ■ 森林価値を見直す「森林文化」の視点

**町田** 森林は「森林が人間に与えるもの」と「人間が森林に作用する」相互作用の結果と、先生は述べておられますね。

また、ヨーロッパの森林は、農村都市の人間が使いやすく森林を伐採して再構成したものだ、と、著書の中で述べておられる点は、私にとって大変新鮮でした。

**北村** ドイツは100年間にわたり、人間のルールで森林を取り扱ってきました。しかし、20世紀末から毎年台風が来るようになり、多くの森林が倒れてしまいました。

そこでドイツでは、人間の方法で森林を整然と育てすぎると、その後森林は弱くなり倒れやすくなることを自然から学び、森林の取り扱い方法を自然の力に任せることに変えました。

人間がどんなに工夫を重ねても、自然を超えることは出来ません。自然の偉大な働きをみることで、人間のささやかな考えは排除されます。人間が自然をコントロールするのではなく、自然界に戻らなくてはなりません。

**町田** ヨーロッパは森林が破壊されたことで、あらためて森林の大事さを実感したのですね。その点で日本は、森林に恵まれすぎてきたような感じがします。

**北村** 日本はヨーロッパのような自然との付き合い方と全く違います。日本はドイツとは違う方法、すなわち日本に見合う方法で森林との付き合いを考えなくてはならないと思います。

**町田** 日本の文化は非常に多層的です。縄文、弥生時代には仏教、江戸時代は儒教、そして明治以降はキリスト教と文化を上積みしながら、日本人の精神構造が造られてきたと言えるのではないのでしょうか。

**北村** 戦後はめまぐるしく変わって、日本人の精神も

ずいぶん変わってきたと受け取られてきましたが、実はそんなに変わるものではないと思います。日本人の精神構造が「層をなしている」という点は重要な視点だと思います。宗教哲学者の山折哲夫さんも、混沌のなかでこそ新しい物が創られていく、つまり「重層構造」のことを言っていました。私もそのことにもっと早く気がつけば良かったと、最近つくづく思います。

**町田** 先生にはこれからさらに森林文化の重要性を喧伝していただきたいと思います。

**北村** 私には「もう時間がない」という思いが強くなってきました。先ほどのように「なんでもっとはやく気がつかなかったのだろう」という気持ちが溢れています。

今、鶴岡市とドイツの南シュバルツバルト市との友好提携をめざして取り組んでいます。姉妹提携によって、異なる文化を受け入れること、それで鶴岡市にも新たな可能性が広がるでしょう。

**町田** これから交流人口を増やすことは大事だと思います。山形県も秋田県もこの点は共通する課題です。単に仲間同士居心地の良さを求めるのではなく、異なる文化や異なる意見と交じり合うことを通じて、次の新しい世界が開けてくる機会となることが重要なのです。鶴岡市にとってドイツの都市との姉妹都市提携は、このような新しい交流を促すきっかけになり、素晴らしいことです。



旧六十里街道

## ■ 森林と人間との交流から始まる

**町田** 私も日本の未来を考えるうえで、ヨーロッパが大変参考になるのではと考えています。例えばヨーロッパの金融をみると、フランスやドイツなどそれぞれの国に異なる金融慣行がありますが、いまEUは通貨統合など新しい経済圏を構築しています。

世界では宗教や民族の違いからそれぞれ独立し、国が細分化されつつありますが、それに対してEUが取り組んでいるような「人間の知恵と努力によってヨーロッパ地域を1つにしよう」という試みは素晴らしいと思います。過去にはフランスとドイツは絶えず争いを繰り返してきた歴史がありますが、今、ヨーロッパはこの2国を中心にEUを作り上げることで「人間に対する信頼を回復しよう」と取り組んでいるように思えるからです。

**北村** 異なる国々をEUとして1つにしようという壮大な取り組みは素晴らしいと思います。

**町田** 市町村合併によって鶴岡市は東北一の広さを持つ地域となりました。旧朝日村のほとんどは森林で、鶴岡市にとって今後森林をどのように大事にしていくかはメインテーマでもありますね。

**北村** せっかく市町村合併してもマイナス面だけが出てきては意味がありません。周辺市町村にとって合併してよかったと思える地域にならなくてはなりません。

鶴岡市は「森林文化都市宣言」をしました。なかには「森林文化で何ができるのか」と問う方もありますが、その答えは簡単には分かりません。多くの可能性を持った森林をテーマとして設定することが大事で、どんな目的が達成出来るのか、出来ないかではなく、何が出来かわからないことが楽しみなのです。

**町田** 森林と人間の交流、そして異なる文化との交流がさらに新しいエネルギーや元気、活力を生み出すのでしょうか。これから私たちはどのように森林と関わったらよいのでしょうか。

**北村** 「森林文化」とは何も難しいことではなく、日常のこととして森林が語られること、また森林と付き合い合うことだと思っています。森との付き合いが普通に語られるようになって、はじめて「森林文化」となるのです。

そのために、まず山に関心を持つことでしょう。そして森林に行くこと。そこで自分の目で見たり、虫にかぶれたり、香りをかいだり、実際に足を運んで体験すること、つまり森林との対話と交流から始まるのです。

**町田** 先生のお話を伺い、あらためて森林について理解と関心を深めることができました。本日はお忙しいところありがとうございました。